

令和元年 8 月 2 日

あきる野市議会議長 殿

会 派 名 明るい未来を創る会
代 表 者 合 川 哲 夫



会派の（ 調査研究 ・ 研修 ） 報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または研修実施日	令和元年 7 月 2 日（火） 3 日（水）
2 調査研究または研修の場所	2 日－茨城県境町 （別紙 1 の 1 ～ 1 の 2）
	3 日－長野県軽井沢町 （別紙 2 の 1 ～ 2 の 2）
3 調査研究事項または研修名	境 町 ふるさと納税について
	軽井沢町 ふるさと納税、教育応援分について
4 参加者氏名 （ 5 名）	中村のりひと、清水晃、奥秋利郎、村木英幸、合川哲夫
5 調査研究または研修の概要及び感想等	別紙のとおり



研究視察事項 ふるさと納税について

茨城県境町概要

面積 46.58平方キロ

人口 24,324人（平成30年1月1日現在）

一般会計予算 152億5000万円（平成30年度）

境町は関東地方のほぼ中央、茨城県の北西に位置し、周囲は埼玉県、群馬県、千葉県に接し、江戸時代には利根川、江戸川の水利を活かし、水運の拠点、日光街道宿場町という、交通の要衝として栄え、現在では、圏央道の茨城区間全線が開通し、成田、羽田、茨城の各空港、東京駅の各所要時間は約1時間で結ばれるようになり、この交通の利便性向上により、境町にもたらす経済効果が期待できる状況になった。

これに伴って「ふるさと納税制度」を活用し、平成25年に6万円、平成27年8億4千万円、平成29年度では22億8千万円と茨城県では第1位になり、その納税額を様々な事業により人材育成、物的財産を増やしていった。その一例は、小学生からの本格的な英語教育、庁用車両を水素ガスエンジン車に総て変え、水素供給基地を庁舎前に設置しいつでも供給可能としている、又太陽光発電にも積極的に取り組み、環境行政は勿論、税収にも大きく貢献している。

数々の返礼品にも工夫を加え、2万2,800発も上がる利根川大花火大会へのバスツアーの募集等々観光客誘致、又地元の特産品のブランド化による返礼品の発掘も積極的に行った。

PR事業では、東京国際フォーラム、TKPガーデンシティ品川で、又地元でも医療センター、町の新春のつどいなどでPRを行い、リピーターの増員を図るなど、様々な返礼品には、町の特産品の食料品、体験事業、観光事業などで町の活性化に、大いに貢献した。

感想

ふるさと納税制度を利用し、返礼品による納税額増を図るのみでなく、その財源をもとに、英語教育での将来に向けた人材育成、環境保全、福祉政策への取り組み等々、うまくふるさと納税制度を活用し、境町の人口減少に歯止めをかけ、財政の立て直し、財政調整基金を安定させた。

これらは、若い橋本町長から生まれる発想と行動力、指導力によるところが大きいと思う、又それに応えられた行政マンの結束力で街、人を牽引してきたことの成果の表れと思った。



研修風景、橋本町長が一人で総ての項目を講義した。
奥に見える女性職員は新入職員で同じように研修として
参加させていた。
ここが町長の発想の素晴らしいところだと思った。



橋本町長を中心に議長、副議長、副町長を交えた
視察記念写真

研究視察事項 ふるさと納税、教育応援分について

長野県軽井沢町概要 面積 156.03平方キロ

人口 20,295名（平成31年4月1日現在）

一般会計予算 125億5,000万円（平成31年度当初）

内自主財源 107億2,894万円（85.5%）

標高 900～1,000メートル

古くから避暑地として栄え、財界、政界の著名人が別荘を構え、日本を代表する国際親善文化観光都市として内外の注目を集めている。

今回の軽井沢町視察では単にふるさと納税教育応援分としていたが、中身の濃いふるさと寄付金の利用を実施していた。

大きく分けて①守ろう豊かな自然、②育もう教育と文化、③増やそう健幸人、④おまかせ、と大きく4項目に分け、それぞれの目的にあった寄付金をいただいている。寄付金のうち、②の育もう教育と文化に多くの寄付金が集まり、平成30年度では全501件3億6077万1千円の内、475件3億5110万1千円じつに97、3%もの金額が集中していた。

我々の視察は主に第②項目の教育応援分について研修を行った。

町では平成20年に「さわやか軽井沢ふるさと基金条例」を制定し、それに基づき平成24年6月に「さわやか軽井沢ふるさと寄付金「教育応援分」実施要領」をまとめ、市内の幼稚園、小中学校、県立高校、私立高校にふるさと寄付金を教育応援分として補助して来た。

この軽井沢ふるさと寄付金の特徴は返礼品の無いことである。事前に用途を決めこれに対しての寄付金を受け取り、それをどのように使途したか、のちにどこへ支出し、どのように使われたかを御礼の言葉を書き添えて報告するのみで、このような方法で寄付金を、平成30年度には総額3億6077万1千円もの寄付金をいただいたことになる。その中のISAKに②のうち、97%もの寄付金が当てられた。

ISAKとは正式には、UWC ISAK（ユナイテッドワールドカレッジISAKジャパン）の総称で、国際社会で変革を起こせるようなチェンジメーカーを育成する全寮制国際学校で、50年以上の歴史を持ち、今は世界73ヶ国から190名の高校生の約7割の生徒に、夏の軽井沢でのサマー・スクール開校のときに、この寄付金を活用した奨学金を給付し、これからも地域社会に貢献しながら、時代を切り拓く生徒たちを育成するよう努力していく、とのメッセージをいただいている。

感想

ISAKの関係者の小林りん氏から、平成25年に寄付の呼びかけをしたところ、後から寄付金額が増加しているとのこと、これまでできなかったことに取り組み、挑戦をしている。

このことについては役所を頼らず独自でも寄付金を募っていく関係者の姿勢に共感を覚えた。残念なことに軽井沢出身のISAKの高校生はまだいない。軽井沢の高校生を増やし、国際親善文化観光都市にふさわしい人材の輩出に繋げていければよいと思うし、我があきる野でも、マルボロウ市中学生交流にも力を入れてほしいと思った。



軽井沢町庁舎前にて記念撮影